

—— 戦時中の保育と教材 ——

斉藤 芳子

前日も触れたが、戦前の幼稚園会によって認可されていた幼稚園の保育項目は、遊戯、唱歌、談話、観察、手技の五項目であった。

戦前、戦中、戦後と五十年間、幼児と共に過して来て思うことは、どんな激動の時代にも、幼児は純真で、可愛らしく、何時も変らなかつたことである。大人に全くまかせて毎日楽しく生活していた。

そんな幼児を変えるのは、社会であり、教育であり、大人であるをつくづく考えさせられた。大人の責任、特に幼児教育者の重責をずっと感じながら過ごして来た。

神と人から愛される正しい人間形成の土台づくりを、誠心誠意、愛をもって教育をしなければと思つた。

しかし、息づまるような戦時生活の中での保育は大変だった。着る物、食べる物、売っている物は何もなくなつた中で、一番困つた

のは保育教材が手に入らなくなったことだった。

絵を描くのも八ッ切の半分位の大きさのザラ紙が普通で、必ず裏表に描いた。それもなくなれば、新聞紙に墨汁で描いた。

それでも幼児は喜んで、のびのびとかいていた。粘土もなくて、「歩け歩けの国民体力増進運動」の国の方針にならって、2キロの道を歩いて、利府街道の割山の粘土づちを掘って持ち帰り、粘土細工を楽しんだ。その頃豆細工をよくしたものだ、材料のヒゴ竹がないので、各家庭から破れうちわや、破れ提灯を集めて、一晚、たらいで水に浸し、古紙と糊を洗いおとして、骨竹を取り出してヒゴ竹に使った。勿論、豆などないので、山の粘土を小さく丸めて豆をつくり、豆細工手技をした。

古紐、古新聞、古葉書、古封筒、空箱、棒

切れ等々、何一つ捨てられなかった。大切な大切な戦時の教材だった。

今のようにわざわざ空箱を集めたり、いろいろのものを集めて、創造性の芽生えを育てるなど努力しなくても。

戦時中の教材のない幼児達は、芽生えようとしている創造欲が、石ころでも、葉っぱでも、何んでもかんでも自然物、廃物を使って創意工夫して造り出し、生き生きと得意になって遊んでいた。

今のように、先へ先へと豊かに与えられずぎると、かえって生き生きとした創造性が出てこないのではないかと思う。

無から有を生むというが、求めて探し出し与えられて創造したものは、ほんとの感動を経験するのではないだろうか。

創造の感動が又次の創造を求めて、生き生きと発展していくように思う。

砂遊び道具も、各家庭に呼びかけて、かけたお椀や、飯杓子、穴のあいた鍋、空缶など幼児の遊びに安全なものを出していた。よいて、砂も売っていないので、どろんこ遊びや、水遊びなどをしていた。

色紙の不足は秋の赤いもみじ、黄色いもみじ、みどりの葉っぱなどを皆で押葉にして、乾燥させ、モザイク遊びや、落葉の特技をした。飛行機、飛行船、軍艦などを落葉で作っていたのは、戦時社会だったからだろう。

やがて各家庭に廃品すらもなくなり、戦争も本土決戦にまで追いつめられて、日本の上空にも、空襲が続くようになった。

関東、関西、九州等、次々と幼稚園の閉鎖命令が出た。殆どどの幼稚園が閉鎖し、学童は地方へ疎開した。そんな時、東京のフレール館に若干教材が残っているとの情報が入

った。

園児の父兄で船主の方が「塩鮭を寄附するから教材を分けてもらったら……」と、持って来て下さった。

その頃は原始時代のように物々交換の状態だった。

園長は幼児の教育の為、喜んで厚意を受け、塩鮭をリュックサックにつめて背負い、特急もない時代で鈍行の満員列車で上京した。途中何度か空襲警報で列車の立往生があり、生命がけの教材準備だった。

敵機の集中爆撃を受けている東京では、塩鮭はダイヤモンドよりも価値ある生命の糧であった。

帰りは色紙や、残っているいろいろの教材をリュックサックいっぱいにつめて帰った。

そして、長年の購入と、東北より生命がけの上京の労をねぎらって「観察絵本キンダー

ブック」の吉沢廉三郎画伯の原画二枚を会社からいたゞいた。今でも大切に保存している。

その頃「キンダーブック」も「ミックニノコドモ」と改名されていた。

ニュースを報道、レコードを音盤、ハレルヤコーラスを「めでたや、めでたや」と歌うなど、敵国語使用を禁止されていたからである。

時々園児が作った手技や絵を、出征軍人の父兄や、仙台の第二師団の陸軍恤兵部などにあて、若い先生方の慰問文と共に、慰問袋として送ることが、戦後の国民の責任だった。

たまに帰って来る戦死者の遺骨を迎えに行く度に、戦場で苦勞している父、淋しく父を待つ幼児や母親を見た。そして、たとえ図画一枚でも喜んでもらえるならと、皆で紙の工面をして描いたものである。

音楽の指導も、戦争になってから、当時の男子の学校の音楽教育の軽視が禍いして、例えば、防空聴音機があっても、早期に敵機を探知することが下手で、本土空襲をされたこともあった。

我が園では、音感教育は幼児期が最も大切な時であるとの信念から、早くから音感訓練をしていた。和音のいろいろで、爆弾投下、伏せ、走れ等々を交えた音感遊びで、退避訓練をしていた。

歌も情操的なものが少なくなり、勇ましいリズムや、戦争ごっこの律動、兵隊さんや、看護婦さんを讃える歌、食糧増産で「お百姓さんありがとう」などの歌を教えるようになっていた。日本中軍艦マーチや、いろいろの軍歌など、勇ましい歌声が流れた。

子どもたちは、どこへ行っても兵隊ごっこ

遊びをしていた。

日本中すべて戦争高揚にかりたてられた。

平和な文化的な遊びや、情緒的な歌は、柔弱な人間を造るといって批判された。

昭和十九年度の卒園児で、大学卒業後ずっと国公立の教育界で働きをしている先生がいる。六十年四月に出版した、私達の幼稚園の七十年記念誌の「保育の歩み」の一言に、同窓生の想い出として、一文を寄せていた。

「幼稚園の音楽教育から」と題して……。

「……私の幼稚園生活は、戦争が激しくなつて、塩釜港を狙った爆弾が次々と落されていった頃のことです。敵機襲来のサイレンの時は、園庭の隅に造られた防空壕に走り込み、防空頭巾の端をしっかりとつかんで、頭上の爆音を聞いていたこと、空襲警報の不気味なサ

イレンが鳴り響く町の中を、先生に手をつながれて、家路を疾走したこと等が強烈に脳裏に焼きついています。

またホールで円陣をつくりスキップをしたり、リズム遊びをしている時、突然ピアノの低音部が鳴り出し、それを聞くと同時に、一斉に身を床に伏せ、頭をかまえて微動だにさえ、できなかったこと、友達みんながホールいっぱい丸まって伏せていた様子が、鮮明に見えてくるのです。

楽しい音楽遊びの中に、時世に必要な訓練が意図されていたのだろうと思います。

今でいえば、リトミックのようなものだったのでしょうか。

確かに幼児期には音感教育のリズム遊びが大切な教育内容であり、幼児の諸機能の発達を促すひとつのものであります。それがやがて生活において音楽を受容し、また表現する

ことを楽しむ人に育ててくれるものであると思えます。

そういう意味において、私の音楽へのスタートは幼児期の音楽的環境によるものであったと思います。また、ピアノを弾く先生の手を不思議に思い、美しい歌声に魅せられて、先生の素晴らしい力に驚きながら、童話の世界へ引き込まれていたものでした。

戦争が激化した頃から、幼稚園に戦時保育所の併設が要請されたり、軍関係に園舎が接収されて、休園の止むなきに至った幼稚園が続出しました。しかし塩釜聖光幼稚園だけは、保育活動を、継続したという事実を聞くにつけ、これは信仰に支えられた先生方の熱意によるものと思ひ、心より敬意と感謝の気持ちでいっぱいになったものです……………」

教育指導主事という忙しい職務の中を、一文を寄せられ、同じ教育の立場で、よく理解

していただけて、ほんとに報いられた思いである。

幼児はおさない、と思っていた幼児が、こんなにも鮮明に幼稚園生活をおぼえ、保育の小さいことまで記憶されていることが実証されて、現場の先生方とともども、

「幼子の一人をも、軽んぜず、愛と誠をもって、丁寧に保育をしよう」

と皆で心に誓い合ったものだった。